

2022(令和4)年度 個別学力検査 前期日程

文学部 人間関係学科 小論文

【注 意】

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 試験時間は9時30分から11時30分まで(120分間)です。
3. この問題冊子は表紙以外に5ページあり、解答用紙は1枚あります。
4. 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
5. 解答はすべて解答用紙の解答欄に記入してください。
6. 解答用紙の氏名欄を除き、受験者本人の特定につながるような氏名、住所、学校名等は記述しないでください。
7. 解答用紙を持ち出してはいけません。持ち出した場合、試験をすべて無効とします。
8. 試験終了後、問題冊子は持ち帰ってください。

次の文章を読み、問いに答えなさい。

コウモリが体験をもつことを疑う者はいない、と私は思う。何と云っても、彼らは哺乳類であり、ネズミやハトやクジラと同じように、彼らもまた体験をもつことは疑いえないからである。スズメバチやカレイではなくコウモリを選んだのは、系統樹をあまり下りすぎるとそもそも、そこに体験が生じているという信念そのものが弱まってくるからである。コウモリは、そのような他の種よりもわれわれと近い関係にあるとはいえ、にもかかわらず活動領域と感覚器官においては、われわれとは大いに異なっているので、コウモリをとりあげることによって、私の提起したい問題は例外的なほど鮮やかに示されることになるのである。哲学的反省によって助けられるまでもなく、閉ざされた空間の中でしばらくのあいだ興奮したコウモリとともに過ごした経験がありさえすれば、誰でも根本的に異質な生のかたちに出会うことが何を意味するのかわかるはずである。

コウモリが体験をもつという信念の本質を形成しているのは、コウモリであることがそのようにあることであるようなその何かが存在しているということである、と私は述べた。さて、周知のように、大部分のコウモリは主としてソナーによって、つまり反響位置決定法によって外界を知覚する。すなわち、高感度で微妙に調節された高周波の叫び声を自分から発して、有効範囲内にある諸対象からの反響音を検知するのである。彼らの脳は、発せられる衝撃波とそれによって引き起こされる反響音とを相互に関連づけるように設計されている。そして、このようにして獲得された情報によってコウモリは、われわれが視覚によって行なうのと同じように、対象の距離、大きさ、形、動き、感触を正確に識別することができるのである。しかしコウモリのソナーは、明らかに知覚の一形態であるにもかかわらず、その機能においては、われわれのもつどの感覚器官にも似てはいない。それゆえに、ソナーによる感覚が、われわれに体験または想像可能な何かに、主観的な観点からみて似ているとみなすべき理由はないのである。この事実は、コウモリであることはどのようにあることなのかを理解するために、障害となるようにみえる。われわれは、何らかの方法によってわれわれ自身の内面生活からコウモリのそれを推定することができるかどうか、もしできないならば、コウモリであることはどのようにあることなのかを理解するために、他のど

んな方法がありうるのか、を考えなければならないのである。

われわれが行なう想像の基本的な素材は自分自身の体験である。それゆえ、そのおよぶ範囲は限られている。自分自身について、次のようなところを想像しようと試みても、それは無理であろう。腕に水かきがついていて、それを使って夕暮れや明け方にその辺を飛び回り、口で虫をつかまえているところ、あるいは、視力がひじょうに弱く、周囲を高周波の反響音信号システムによって知覚しているようす、そしてまた、日中は屋根裏部屋でさかさまにぶら下ってすごしているありさま、といったことである。私に可能な範囲では、そのような想像によってわかることは、私がコウモリのようなあり方をしたとすれば、それは私にとってどのようなことであるのか、ということにすぎない。しかし、そのようなことが問題なのではない。私は、コウモリにとってコウモリであることがどのようなことなのか、を知りたいのである。だが、それを想像しようとすると、私の想像の素材として使えるものは私自身の心の中にしかなく、そのような素材ではこの仕事には役に立たないのだ。この仕事は、私の現在の体験に付加されたものを想像しても、逆にそれから少しずつ除去されていった部分を想像しても、あるいはまた、付加、除去、変様の組み合わせを想像しても、そのようなことではなされえないのである。

(中略)

われわれはここで、心理的なものを物理的*₁なものに還元する際の一般的な困難に直面しているように見える。他の領域では、還元の過程は、事物の本性をより正確に知ることを求めて、客観性の増大する方向へ移動することである。それは、探究対象へ向かうに際して、個人的なあるいは種に固有の視点への依存度を減らすことによって実現される。われわれは、もはや対象がわれわれの感覚器官に与える印象によってではなく、対象の与えるより一般的な効果や、人間の感覚器官以外のものが発見できるような性質によって、その対象を記述するのである。特殊人間的な視点への依存度が減るにつれて、われわれの記述は客観性を増す。この途をたどることが可能なのは、外界について考える際にわれわれが使用する概念や観念は、最初にはわれわれの知覚器官に依存する視点から持ち込まれるとはいえ、それ自身を越えて事物そのものを

指示するのに用いられる——そしてその事物に向かつてわれわれは現象的な視点を持つ——ようになるからである。それだからこそわれわれは、その現象的な視点をすて、別の現象的な視点をとつても、なおやはり同じ事物について考えていることが可能なのである。

体験それ自体は、しかし、このパターンに当てはまるとは思えない。外見から実在への移行という考えは、ここでは意味を失うように思われる。体験の場合に、同じ現象のより客観的な理解を求めて、それへ向かう最初の主観的な視点をすて、より客観的な別の視点をとる、といったパターンに相当するものは、いったい何だろうか。人間の体験の真の本性に近づこうとするのに、人間の視点の特殊性をすて、人間であることがどのようにあることなのかを想像できないような存在者にも理解できる記述を求める、というのは、確かに一見して成功の見込みがなさそうである。体験の主観的な性格は一つの視点からしか十全に把握されない以上、客観性の増す方向への移行——すなわち、特殊な視点への結びつきが減る方向への移行——は、現象の本性へ近づくことにはならず、むしろそこから遠ざかることになるのである。

(中略)

一つの思弁的な提案をして、結びとしよう。主観的なものと客観的なもの間にあるギャップを問題にするには、また別の方向からのアプローチも可能なのである。心と脳の関係はしばらく^脇に置いておくことにして、われわれは心的なものそれ自体のより客観的な理解を追究することができる。目下のところわれわれは、想像力に頼る以外には、——つまり体験する主体の視点をとってみる以外には——体験の主観的な性格について考えることがまったくできない。この現状は、新たな概念と新たな方法——自己投入や想像に依存しない一種の客観的な現象学*₂——を考え出すことを要求しているとみなされるべきである。おそらくこの現象学によって何でも記述されるようになるというわけにはいくまいが、体験の主観的な性格の少なくとも一部が、その体験をもちえない存在者にもわかるように記述されるようになることぐらひは、目標として掲げることができるであろう。

コウモリのソナー体験を記述しようとするれば、このような現象学が開発されねばな

らないだろう。だが、人間どうしの場合から始めることも可能であろう。たとえば、見るとはどのようなことなのかを、生まれつきの盲人に説明するために使える概念を開発してみてもよい。その企てはどこかで壁に突き当るであろうが、現在われわれが使えるよりもはるかに多くの客観的な言葉を用いて、はるかに正確に表現する方法を考え出すことは、可能なはずである。だが、たとえば「赤はトランペットの音に似ている」といったような、この問題に関する議論にときどき顔を出す感官を統合するルーズなアナロジーは、ほとんど役に立たない。それは、トランペットの音と赤い色の両方を知っている人なら、誰でもわかるはずである。しかし、知覚の構造的な特徴についてならば、何か抜け落ちるものはあるにせよ、客観的な記述は比較的容易であるかもしれない。そして、第一人称においてわれわれが習得する諸概念に代る諸概念の助けをかりることによって、われわれは自分自身の体験についてさえも、主観的な概念がわれわれに与えてくれる記述の容易さと距離の欠如のためにかえって把握しにくかった新たな理解に、達することができるようになるかもしれないのである。

それ自体としての興味を離れても、そのような意味で客観的なこの現象学になしうることは、体験の物理的な基礎に関する問いを、より明快な問いにつくり変えることである。この種の客観的な記述を許容するような主観的な体験の諸側面ならば、もっと馴染み深い種類の客観的説明に関しても、そのよき候補者となるであろう。しかし、この推測が正しいにせよ誤っているにせよ、心に関する物理的な理論を思い描こうとするならば、まず主観的なものと客観的なものに関する一般的な問題を、よく考えてからでなければならない、とは言えよう。そうしなければわれわれは、心身問題*₃を取り逃がすことなく設定することさえできないのである。

(トーマス・ネゲール [永井均 訳] 『コウモリであるとはどのようなことか』による。ただし、出題に際して原文の一部を改めた。)

*₁ 物理的：原文英語では **physical**。物理的と身体的の両義的に使われている。

*₂ 現象学：哲学や科学の確実な基礎をすえるために、一切の先入観を排して意識に直接に明証的に現れている現象を直観し、その本質を記述しようとする方法。

*₃ 心身問題：mind-body problem 精神と身体の間をめぐる哲学上の問題。

問 著者は、心身問題を理解するためのひとつの思考実験を提案している。まず、下線部①について、この記述はどういうことをさすのか、そしてなぜそう言えるのかについてわかりやすく説明しなさい。その上で、この一連の論考のなかでとりあげられている体験、現象、主観、客観などのキーワードを手がかりにして、他者を理解することの難しさを説明し、それを乗り越え、他者理解を可能にするための方法について、具体的なアイデアを考え 1000 字以内で述べなさい。(200 点)